

し敵の兵力は歩兵約一旅團以上騎兵約二中隊砲八門なり
四日午前八時馬三家子に續て前心臺子に向ふ命に依り第一中隊を馬三家子に
殘置し五日平羅堡に(此日馬三家子在第一中隊歸還)次て六日劉家窩棚に前進し八
日全勝堡に至る

十日午前八時三十分九里溝に向て前進中大新屯の北方約二千米突の地站に至
り前衛騎兵第十四聯隊は窩家淺の敵に向て徒歩線を開始す戦利砲二門及騎砲兵
中隊は之れに向て砲撃す

歩兵第一中隊を以て徒歩戦を援助し第二中隊を大新屯北方約千五百米突の墓
地附近に散開し攻撃前進す敵は銃眼に據り損傷少く我死傷續出す敵前約六百米
突に至り射撃を開始せしも敵歩兵頑守す正午命に依り第二中隊は各固に墓地迄
退却す午後三時四十分大隊は大新屯村端を占領し同時に宿營す

十一日午後一時大新屯出發石佛寺に向ひ三臺子附近にて敵歩兵を撃退し對庄
房に十二日腰中臺に十三日長河治に至る

十四日午前七時卅分前進を開始し前衛は孤家子北方高地を占領大隊は孤家子

北方高地に至り前衛と協力して該高地を占領し第九師團の縦隊來り合するに及
ひ其守地を讓る尋て支隊は小泥河に向ひ前進し大隊は前衛と協力して小泥河高
地を占領し退却せる敵を追躡し北部湯牛堡子に宿營す

十五日孤家子を経て遼河を涉り十六日長溝冶を経て三臺子に至り原隊に復歸
を命せられ十八日黨家窩棚に至り聯隊に合す

三月三日大房身附近の戦闘に就き感狀を授與せらる

感 狀

- 歩兵第三聯隊第一大隊(二中隊欠)
- 騎兵第一旅團
- 騎兵第二旅團
- 騎兵第三聯隊(一中隊欠)
- 騎兵第九聯隊(一中隊欠)
- 野砲兵中隊

野戰砲兵第二旅團戰利速射砲中隊
第一、第二、第三、第四機關砲隊

右諸隊は秋山少將の指揮に屬し三月三日大房身附近の戰闘に於て優勢なる敵の攻撃を拒止して軍の左側背を安全ならしめ遂に之を擊攘して多大の損害を與へ以て軍の作戰を容易ならしめたり其功績顯著なりと認む
依て茲に感狀を授與す

明治三十八年三月十二日

第三軍司令官陸軍大將正三位勳一等功三級男爵乃木希典
去る十三日付奉天會戰の戰捷に對し勅語を賜はる

勅語

奉天は昨秋以來敵軍此處に強固なる防禦工事を設け優勢の兵を備へ必勝を期し功を争はんとせし處なり我滿州軍は機先を制し轟然攻進し互寒氷雪中力戰健闘十餘晝夜を連ね遂に頑強死守の敵を擊破し數萬の將卒を擒とし多大の損害を與

へ之を鐵嶺方向に驅逐し曠古の大勝を博し帝國の威武を中外に發揚せり
朕深く爾將卒の克く堅忍持久絶大の勳功を奏したるを嘉す尙益々奮勵せよ
右勅語に對し滿州軍總司令官より左の如く奉答せらる

奉答

奉天附近に頑強の抵抗を試みし敵を潰亂に陥らしめ確に彼に一大打撃を加へ此會戰に於ける我軍の目的を達したるは一に陛下の御稜威に依る今茲に優渥なる勅語を拜し臣等感激の至りに堪へず爾後益々奮勵し誓て聖旨に酬ひんことを期す

右謹て奉答す

明治三十八年三月十四日

滿州軍總司令官 侯爵 大山 巖

第十一節 奉天會戰後より凱旋に至る

三月十三日來党家窩棚に宿營す

四月十三日に至り更に北方遼河左岸施家荒地に移轉し郝家溝南方高地に防禦
工事を行ふ

四月十七日より五月三日迄第二大隊を通江口に派遣同地の守備に任す

五月三日胡家屯附近に次て同廿四日劉家屯附近に宿營を移轉す七月二日敵騎
南下に際し聯隊三大は警急集合し花揚樹附近に至り遼河右岸を警戒し敵騎退
却せる后宿營地に歸還す

九月十六日休戦

九月廿七日師團出征以來戦病死者の招魂祭を孤樹子に於て舉行せらる

十月十六日平和克復の詔勅を宣布せらる

此日陸海軍人に左の勅語を賜はる

勅語

朕が親愛する帝國陸海軍人に告ぐ

朕嚮に汝等に示すに軍人の精神たる訓規五箇條を以てし明治廿七八年戦役終る

や深や我家の前進を念ひ更に汝等に諭示する所あり爾來十閏年

朕が陸海軍は世界の進運に伴ひ經綽大に其歩を進めたり

不幸にして客歲露國と釁を啓きしより汝等協力奮勵各々其任務に従ひ籌畫宜し
きを得攻戰機を制し海に陸に曠古の大捷を奏し帝國の威武を宇内に宣揚し以て
朕が望に副へり

朕は汝等の忠誠勇武に賴り出帥の目的を達し上は祖宗に對し下は億兆に臨み天
職を盡すことを得たるを憚り深く其戰に死し病に斃れ又は癘疾となりたるもの
を悼む

朕今露國と和を講す惟ふに我軍の名譽は帝國の光榮と共に汝等の責務を重から
しめ國運の隆昌亦汝等の努力を待つこと大なり汝等其れ能く朕が意を體し留
まつて軍隊に在るものと散して郷閭に歸るものとを問はず常に朕が訓諭を服膺
して朕が股肱たるの本分を守り益々勵精以て報效を期せよ

十月廿一日出征軍慰問の爲め尾藤東宮武官を差遣せられ優渥なる令旨を賜は
る

明治三十九年一月十八日凱旋の爲め宿營地を發し同月廿二日より鐵嶺停車場
出發

一月廿五、廿六日大連出帆二月一日より同四日迄に屯營歸着

二月五日復員令下り同日解散式を行ふ

四月三十日青山練兵場に於て凱旋觀兵式を舉行せられ近衛第一師團全部各師

團代表隊及後備軍旗隊參列す

大元帥陛下臨御閱兵分列式を施行せられ終りて凱旋行軍を行はせらる

五月一日より四日迄靖國神社臨時大祭を施行せられ二日軍旗を有する代表隊

を編成し參拜す

第十二節 日露戰後ヨリ大正三年十月ニ至ル

重要記事

明治三十九年二月十六日英國皇族アーサー、オフ、コンノード殿下御退京に付迎
送式に服務す

三月九日陸軍紀念日に付分列式を行ふ

九月三日師團長師團檢閲を施行せらる

九月廿九日特命檢閲使陸軍大將子爵川村景明閣下來營閱兵、教練、動員、內務及營
內巡視、將校教育及下士劍術及射擊豫行演習を檢閲せらる

九月廿日特命檢閲野外演習の爲め習志野原へ出張歩兵第二聯隊と對抗演習を

終へ廿三日歸營す

五月一日聯隊長陸軍歩兵大佐牛島本蕃陸軍少將に任し臺灣守備混成第一旅團
長に補せられ陸軍歩兵中佐田中義一當聯隊長に補せらる

九月一日特命檢閲使陸軍大將伯爵奧保鞏來營閱兵、舍内、倉庫の検査將校圖上戰
術を檢閲せらる檢閲の結果良好なり

九月十日特命檢閲野外演習の爲め船橋に向て出發同十一日戰時編制一個大隊
の檢閲を受け同十二日歩兵第二聯隊と對抗歩、騎、砲兵連合の支隊演習を檢閲せら
る結果共に良好にして同月十三日無事屯營に歸着す

十一月十五日より三日間茨城、栃木縣下特別大演習に参加す 大元帥陛下には

十八日大演習終了後奥參謀總長をして講評を爲さしめられたる後左の勅語を賜はる

勅語

講評は今參謀總長をして爲さしめたり之を要するに各團體の戰鬥動作及諸部隊機關の勤務は實戰によりて特に進歩せるを認め朕之を憐ふ然れども今世界軍事の進運は決して寸時の偷安を許さず汝等益々奮勵して他日の大成を期せよ

明治四十一年二月廿日露國公使館附武官補佐セミヨノフ中佐及同國留學生コステンコ大尉の兩名當聯隊新兵教育視察の爲め來營
四月五日師團團長載仁親王殿下檢閲の爲め御來營
十月十五日英國フュージリヤース第七聯隊陸軍大尉イービーノース向ふ六ヶ月間聯隊附の儀允許せられ第五中隊附を命せらる

明治四十二年一月廿八日歩兵第二十二聯隊長歩兵大佐藤井幸槌本職を免し當聯隊長に補せらる

四月十二日觀櫻會を催す

四月十五日英國陸軍大尉イービーノースに退營を命し將校園より紀念の爲め銀盃一組を贈與す

五月十九日臨時韓國派遣隊編成の爲め第十二中隊に派遣を命す

六月三十日特命檢閱使陸軍大將子爵長谷川好道左の事項を檢閲せらる

閱兵本部書類檢査、營内巡視、中隊帳簿及細密檢査

七月一日青山練兵場に於て戰時編制中隊教練次て各個教練、准士官學科、中少尉

准士官見習士官の體操、大尉以上圖上戰術、中少尉筆記試驗

七月廿五日習志野原に於て野外教練の特命檢閱を施行せられ廿八日歸營す

十一月四日故樞密院議長從一位大勳位公爵伊藤博文國葬に付聯隊は外務省附近に堵列す

十二月一日當聯隊長藤井幸槌本職を免し近衛師團參謀長に補せられ歩兵第三

十八聯隊長若見虎治本職を免し當聯隊長に補せらる

三月三十日清國載濤殿下軍事視察の爲め御着京に付近衛及第一師團を以て青

山練兵場に於て觀兵式を舉行せらる

七月廿八日故白耳義國公使男爵タヌタン氏葬儀の爲め聯隊及近衛歩兵第四聯隊騎兵第一聯隊は儀仗の爲め築地に堵列す

八月十二日午後十一時三十分深川本所、淺草、下谷及其附近洪水の爲め罹災民救助の爲め深川、淺草に約四中隊を派遣し同十九日引舉ぐ

八月十四日より築地本願寺、本郷京華學校へ罹災民救助として將校以下約四十名より成る炊爨班を出し同隊は同月廿七日撤去せらる

明治四十四年四月廿四日臨時朝鮮派遣隊たりし當聯隊第十二中隊は任期満了歸還せり

四月三十日師團長の隨時檢閲を施行せられ五月一日終了動員計畫、内務、教育、經理事務等何れも成績良好なり

四月廿九日 皇太子殿下の御眞影を交換拜受す

六月六日伯爵大隈重信國民教育參考の爲め當聯隊に來營視察せらる

六月廿日教育總監大將大島久直閣下教育視察の爲め來營せらる是日師團長閑

院宮殿下御來臨あらせらる

八月三十日臺灣生蠶各酉長等約四十名見學の爲め來營演習、被服庫、兵器庫等を參觀し文明國軍隊の精練なると又準備の周密なるに驚嘆せり

九月二日歩兵大佐若見虎治當聯隊長を免し近衛歩兵第四聯隊長に補せられ歩兵中佐伯爵久松定謨歩兵大佐に任し當聯隊長に補せらる

十一月五日秋季演習の爲め埼玉、群馬の兩縣に出張同廿日午前五時川越を出發し午後五時十分屯營に歸る

明治四十五年五月十日軍隊内務に關する永久命令を改定す

同年五月廿二日特命檢閱使陸軍大將子爵川村景明來營左の事項を檢閲せらる

書類の檢査 准士官、曹長 學科 營内巡視 第七、第十中隊 下士學科 第三、第十中隊 士

官候補生、一年志願兵の學科 一年志願兵、下士の各個教練

同廿三日 演習非常呼集の上武裝檢査 中隊教練

七月十九日畏れ多くも 天皇陛下糖尿病に罹らせられ御不例の由發表せらる臣民一同熱誠御平癒を禱願す

七月卅日午前零時四十三分聖壽御六十一歳にて御登遐あらせらる誠まことに恐懼おその至りに堪たす嗚呼ああ陛下みかど叡明えいめいの資たすけを以て維新いしんの運うに膺あり萬機ばんきの政まつりごとを親まかし内治うちぢを振おこ刷おこし外交がいこうを伸張しんちやうし大憲たいけんを制として祖訓そくんを昭あけし典禮らいれいを頒おちて蒼生そうせいを撫なす文教ぶんぎやう茲こゝに敷おき武備ぶひ爰こゝに整とひ庶績しよせき咸熙かんせいき國威こくゐ維揚ゐやうる其盛德そのせいとく鴻業こうぎやう萬民ばんみん且まに仰あぎ列邦れつぱう共に視みる寔まことに前古ぜんこ未なた曾なて有あらさる所ところなり然しかるに今忽いまち人天じんてんを隔へて給たまひぬ嗚呼ああ悲かなしい哉や

七月三十日午前一時 皇太子殿下新に 皇位に即せらる

同日明治四十五年七月三十日以後を改めて大正元年と改元せらる

是の日午前四時聯隊は瀧ヶ原に於て此の哀報あいはうに接あり驚愕きやうがく措とく所ところを知らす直に正門前に集合し遙はるかに皇城ていじやうを望まみ遙拜はうはい式しきを施行し津野中佐は聯隊長に代りて告辭こくごを述べ衆皆しゆが悲歎ひたん哀愁あいう殆たんど爲なす所ところを知らす

大正元年八月三十日 今上陛下始めての天長節なりしを御大喪期間にて別に祝典を行はせられす一般休務せず唯聖壽せいじゆの無窮むきゆうを禱いのる

九月十三日靈柩れいこ列車れつせん駐ちゅう留りゆう停車場ていじやう衛兵ゑいへいとして左の通り派遣す

品川停車場 安藤大尉 富田中尉 外下士卒八十名

山北停車場 平井大尉 大山中尉 外下士卒八十名

九月十三日御大葬堵列部隊として虎の門附近に整列十四日午前二時 靈輜れいそ御ご發引はつけん青山停車場御ご輓らんに至る迄同所に於て遙拜敬禮す

十月十三日 皇太皇陛下伏見桃山陵御參拜の爲め行啓に付奉送の爲日比谷公園内に堵列す

十二月十一日勅命に依り侍從武官歩兵少佐奥村拓治新兵教育並に内務視察の爲め來營せらる

三月廿一日第十中隊は臨時朝鮮派遣隊として出發の途に就く

七月十一日元帥海軍大將大勳位功三級有栖川宮威仁親王殿下薨去に付三日間及び葬儀執行當日廢朝仰出さる同十七日御葬儀を行はせられ聯隊本部及第二大隊は儀仗兵として第一、第三大隊は堵列隊として服務す

九月廿八日 皇太后陛下京都へ行啓被爲在に付葵橋附近に堵列奉送す

十月四五の兩日に亘り名譽射撃を行ふ名譽射撃は本年より聯隊毎に行ふこととなり第一回の名譽旗第一中隊(中隊長櫻井正友)の占むる所となれり

大正三年二月廿五日此の日大正元年七月卅一日陸海軍人に賜はれたる御親署の勅諭を賜はる

四月十日 皇太后陛下遊御被爲在に付聯隊は赤坂見附附近に堵列奉迎す

四月十一日午前一時四十分 皇太后陛下崩御の旨御發表あらせらる 先帝陛下御登遐あらせられてより日尙淺く愁眉未だ開けざるに今復た俄然此悲報を拜聴し恐懼措くところを知らす

五月十一日歩兵第三聯隊長歩兵大佐伯爾久松定謨本職を免し近衛歩兵第一聯隊長に補せられ同日篠山聯隊區司令官歩兵大佐山田良之助本職を免し歩兵第三聯隊長に補せらる

九月三十日名譽射撃を施行す

十月十三日從來使用せし三十年式銃を三十八年式銃と交換使用す

十月十八日第一回聯隊劍術競技會を施行し第二中隊勝を得優賞表並に名譽防具を附與す

歩兵第三聯隊歴史終

創設以來ノ聯隊長

官 氏 名	在職年月日	備 考
陸軍中佐 中村尙武	至明治十七年十一月十三日	陸軍中佐 病死
同 山治元治	至同十一年一月十七日	陸軍中將 病死
同 山澤靜吾	至同十一年二月十八日	陸軍中將 病死
同 古川氏潔	至同十六年五月九日	退役陸軍少將
同 大寺安純	至同十八年五月九日	陸軍少將 威海衛戰天嶺附近に於て戰死
陸軍歩兵中佐 眞鍋 斌	至同廿二年九月二日	豫備陸軍中將
同 松村務本	至同廿四年十一月廿二日	陸軍中將 遼陽に於て病死
同 木村有恒	至同廿七年八月三十一日	豫備陸軍中將
同 牛島本蕃	至同三十四年五月廿二日	後備陸軍少將
同 田中義一	至同四十二年一月廿八日	陸軍少將 旅團長
陸軍歩兵大佐 藤井幸槌	至同四十二年十二月廿八日	歩兵第七旅團長

同 若見虎治 自同四十二年九月十二日
 同 伯爵久松定謨 自同四十四年九月六日
 同 山田良之助 自同四十四年五月十一日
 外征戰病死將校の芳名左の如し

一七六
 陸軍少將 侍從武官
 陸軍步兵大佐 近衛
 步兵第一聯隊長

明治廿七八年戰役

陸軍歩兵大尉 中萬徳次 明治廿七年十一月十八日
 陸軍歩兵少尉 藤村平三 明治廿七年十一月廿一日
 土城子に於て戰死
 橋子山附近戰死

明治三十七八年戰役

陸軍歩兵少佐 久田國義 明治三十八年三月九日
 陸軍歩兵大尉 久松省三 明治三十七年十一月廿六日
 同 篠田武政 明治三十七年九月十九日
 同 河西修藏 明治三十七年八月廿一日
 明義屯附近に於て戰死
 三里橋北方高地に於て戰死
 水師營南方高地に於て戰死
 三里橋北方高地に於て戰死
 明治三十七年八月廿一日 負傷入院死亡

同 網野善一 明治三十七年八月廿一日 負傷入院死亡
 同 高松公重 明治三十七年七月廿六日 於て戰死
 同 眞々田彰義 水師營南方高地に於て戰死
 同 弘中藤吾 水師營南方高地に於て戰死
 同 高石 捻 三里橋北方高地に於て戰死
 同 阿久刀甲寛海 明治三十七年十一月廿六日 於て戰死
 同 坂元兼良 明治三十七年九月十九日 於て戰死
 同 川崎好次郎 明治三十七年八月廿一日 於て戰死
 同 宗像重吉 明治三十八年三月九日 於て戰死
 同 山本和平 同 上
 同 中岡保彦 同 上
 同 伊達新一 同 上
 同 齋藤文吉 明治三十八年八月廿一日 於て戰死
 同 陸軍歩兵中尉 石川佐一 明治三十七年八月廿一日 於て戰死

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 陸軍歩兵少尉 同 同 同 同 同 同 同 同

荒井彥八
水野正武
桑原矢六郎
大木仁三郎
山口亨
寺田行藏
染谷秀吉
高村省三
相澤金重郎
相良四郎
薄井良介
村岡猪久治
森淺次郎
並木馬藏

明治三十七年七月廿七日
對面溝南方高地に於て負傷入院死亡
明治三十七年八月廿一日
明濠東方九三高地に於て戰死
南明山に於て戰死五月廿六日
同
水師營三十七年九月廿日
對面溝南方高地に於て戰死
明治三十七年七月廿七日
對面溝南方高地に於て戰死
水師營三十七年八月廿一日
對面溝南方高地に於て戰死
明治三十七年八月廿一日
對面溝南方高地に於て戰死
水師營三十七年八月廿一日
對面溝南方高地に於て戰死
李溝東方九三高地に於て戰死
松樹山補備砲臺附近に於て戰死
病治三十七年五月廿一日
毛頭寺崎附近に於て戰死
南明山に於て戰死五月廿六日
田義屯附近に於て負傷入院死亡
明治三十八年三月九日
田義屯附近に於て戰死

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

佐藤一馬
鈴木清彦
高野新八
日坂平太郎
佐藤壯
奥村莫邪
駒嶺忠男
中川尙次
岸田光一
林辰次郎
窪田隆次
橋瓜源之丞
森山由太郎
清水豊次

明治三十八年三月九日
同上に於て負傷入院死亡
永治三十七年九月廿四日
永師營南方高地に於て戰死
病治三十八年一月十二日
李治三十七年八月廿一日
明治三十七年五月廿六日
南明山に於て戰死
同
對面溝南方二七高地附近に於て戰死
明治三十七年七月廿八日
對面溝南方二七高地附近に於て戰死
李溝東方九三高地に於て負傷入院死亡
明治三十七年八月廿一日
對面溝東方九三高地に於て負傷入院死亡
明治三十七年十一月廿六日
松樹山補備砲臺附近に於て負傷入院死亡
永治三十七年九月廿日
永師營南方高地に於て負傷入院死亡
南明山に於て戰死五月廿六日
明治三十七年八月廿一日
水師營南方高地に於て戰死
同
明治三十七年八月廿一日
同治三十七年八月廿一日
同治三十七年九月廿日
明治三十七年九月廿日
同治三十七年九月廿日

山田	田中	高橋	小川	大野	佐藤	鈴木	山田	田中	高橋	小川	大野	佐藤	鈴木	山田	田中	高橋	小川	大野	佐藤	鈴木
...
...
...
...

同 同 同 同

山口清作
松平修吉
齋藤善吉
内田捨五郎

明治三十七年九月廿日
同
田明義 屯三附十 近八年於三月九日死
同
復員後病死

步兵第三聯隊將校同相當官准士官下士職員表

大正四年五月一日調

別	隊	士官											准士官											下士官											職員																	
		中隊	中隊	中隊	中隊	中隊	中隊	中隊	中隊	中隊	中隊	中隊	中隊	本部	本部	本部	本部	本部	本部	本部	本部	本部	本部	本部	少尉	中尉	軍曹	曹長	軍士	軍醫	計手	看護	大尉	中尉	少尉	大尉	中尉	少尉	曹長	軍士	軍醫	計手	看護	大尉	中尉	少尉	大尉	中尉	少尉	曹長	軍士	軍醫
赤木 鈴雄	山本 勝雄	寶生 英正	外	岩田 義信	林 林之助	沖久 中信	戸波 辨次	金田 武	片山 廉之助	澤木 元雄	吉田 佐郷	安藤 正義	武田 秀壽	小林 角太郎	櫻羽 正友	坂部 正健	千坂 洋三郎	富岡 三郎	山田 良之助	渡邊 錠太郎	林 銑十郎	多賀 宗之	伊藤 由藏	小原 正忠	富田 太藏	箱守 七郎	横山 才四郎	小築 孝之丞	平瀬 亨三	北垣 市次	三須 浦次郎	田中 森浩	森田 親三	山本 省三	矢口 正雄	藤原 藤次郎	小原 俊庸	齋藤 近知	大井 清治	宮田 圓治	網田 圓治											

同林會會員名簿

姓名	住址	職業	加入日期	年費	備註
田中 八郎	東京市牛込區	商	大正四年七月	五圓	
山本 三郎	東京市牛込區	工	大正四年七月	五圓	
佐藤 一郎	東京市牛込區	學	大正四年七月	五圓	
鈴木 五郎	東京市牛込區	農	大正四年七月	五圓	
小林 次郎	東京市牛込區	醫	大正四年七月	五圓	
高橋 九郎	東京市牛込區	法	大正四年七月	五圓	
渡邊 十郎	東京市牛込區	商	大正四年七月	五圓	
石川 十一郎	東京市牛込區	工	大正四年七月	五圓	
藤田 十二郎	東京市牛込區	學	大正四年七月	五圓	
山崎 十三郎	東京市牛込區	農	大正四年七月	五圓	
水野 十四郎	東京市牛込區	醫	大正四年七月	五圓	
木村 十五郎	東京市牛込區	法	大正四年七月	五圓	
村田 十六郎	東京市牛込區	商	大正四年七月	五圓	
島田 十七郎	東京市牛込區	工	大正四年七月	五圓	
山口 十八郎	東京市牛込區	學	大正四年七月	五圓	
村上 十九郎	東京市牛込區	農	大正四年七月	五圓	
石川 二十郎	東京市牛込區	醫	大正四年七月	五圓	

大正四年七月二十日出版
大正四年七月廿三日發行

定價 金五拾錢

編者兼發行人

岩田信作

東京市牛込區藥王寺町五十九番地

印刷人

寺田勝士

東京市京橋區新富町四丁目九番地

印刷所

立文社印刷部

東京市京橋區新富町四丁目九番地

東京市京橋區新富町四丁目九番地

發行所

立文社

電話 京橋一六二番
振替 東京二九六五八番

不許複製

近衛歩兵第一、二、四聯隊本部藏書

近衛歩兵第一、二、四聯隊歴史

各全一册 既刊

第二	菊版紙數二二一頁	定價	上製	金七拾五錢	並製	金六拾錢
第一	菊版紙數二一六頁	定價	上製	金七十錢	並製	金五十五錢
第四	菊版紙數一六〇頁	定價	上製	金五十錢	並製	金三十錢

各新聞批評

●時事新報 一般の讀者に興味を以て軍事知識を興ふ

●東京朝日新聞 本邦近衛兵創始の史的略述近衛第一、第二聯隊を置くに至りし次第より最近明治

天皇崩御時代に至るまでの歴史の梗概を述べたり

●萬朝報 近衛の濫觴より明治六年第二聯隊の名稱起り聯隊長を代ふること十四、以て明

治天皇崩御に至る間の聯隊史の重なる部分を編年史體に叙述せるもの同隊に關係あるものは特に

多大の興味を以て讀むべく各聯隊に關して此種の出版を見れば諸々の點に於て益あらん

●やまと新聞 近衛兵の起原より説き起して先帝の崩御に至る迄の光輝ある歴史を叙したり

●東京日々新聞 近衛の起原に溯りて筆を執り 明治天皇崩御に至るまでの聯隊長を主として詳叙

歩兵第一聯隊歴史

全一册 既刊

定價 金六十五錢

319
354

終